



Title	言葉の力、革命の主題をめぐる変奏：詩学「物の味方」の生成におけるポーランの役割について
Author(s)	太田, 晋介
Citation	Gallia. 2021, 60, p. 53-62
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79394
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

言葉の力、革命の主題をめぐる変奏： 詩学「物の味方」の生成における ポーランの役割について

太田 晋介

「私は決して革命家か詩人の姿勢でしか跳ね返らないだろう¹⁾。」この言葉が端的に示すように、ある時期からフランシス・ポンジュにおいて〈詩〉と〈革命〉は等価なものとなされることになる。そのことは1920年代に着想され、数年の時間を費やし準備された日常的な事物の描写をその根幹に据えた「物の味方 (parti pris des choses)」と呼ばれる彼の代表詩学においても同様である²⁾。しかしながら事物を謳うことと〈革命〉は詩人の中で具体的にどう結ばれるのだろうか？

ポンジュにおける〈革命〉という主題は、ブルジョワ社会とその秩序／言語への反逆、詩的前衛とりわけシュルレアリスムの圏域、ローラン・ジェニーが素描した「革命」という言語・比喩に関わる文芸思想史など様々な角度から論じられるべき複雑な問題系である³⁾。その点を断った上で、本稿ではこの主題をルーベ・デル・バイルがその書で論じた「30年代精神」の文脈に引きつけて考えたい⁴⁾。この時期、革命を志したのはポンジュや前衛詩人たちばかりではない。二つの大戦に挟まれた危機／小康 (crise) の時代である1930年を中心とする数年は、人々の間でヨーロッパ文明の終息が意識された期間であり、多くの若き知的エリートたちが既存の価値を打倒し、新たな秩序・価値を打ち立てることの必要を訴えた時代である。雑誌を中心に様々なグループを形成した彼らに共通するのはその「非順応主義 (non-conformisme)」である。すなわち彼らは自分たちの直前の世代が、右翼主義、共産主義など特定の主義に従い行動したが望む成果を得られなかったことを目撃した世代であり、その帰結として、真の革命とはそうした主義・イデオロギーの対立を超克したものであると考えたのである。そうした「30年代精神」が志す革命を端的に表すのは詩人シャルル・ベギーの次の言葉である―「革命とは道徳的なものであるだろう、さもなくば存在しないだろう⁵⁾」。後でテキストを通じて確認するが、ポンジュがその詩を以て目指す革命もまた特定の思想・イデ

Francis Ponge の作品からの引用については以下のエディションを用いる： *Œuvres complètes*, éd. Bernard Beugnot, Paris, Gallimard, «Bibliothèque de la pléiade», deux volumes, t. I, 1999 ; t. II, 2002. 以下それぞれを OCI, OCII と略記する。

1) «À chat perché», *Proèmes*, OCI, p. 194.

2) Cf. par exemple : «Cherchez-moi quelque chose de plus révolutionnaire qu'un objet, une meilleure bombe que ce mégot, que ce cendrier.» («Tentative orale», *Méthodes*, OCI, p. 668).

3) L. Jenny, *Je suis la révolution*, Belin, «L'extrême contemporain», 2008.

4) J.-L. Loubet del Bayle, *Les non-conformistes des années 30 : une tentative de renouvellement de la pensée politique française*, Seuil, 1969.

5) «La révolution sera morale ou elle ne sera pas.», cité *ibid.*, p. 290 et *passim*.

オロジーに還元不可能な、人間精神の根本的な変革を目指す革命である⁶⁾。

そうした「30年代精神」に接近させて詩人の革命観を考える場合、避けては通れない存在として名が挙がるのがジャン・ポーランである。25年に急逝したりヴィエールの後釜として『新フランス評論』の編集長に就任したこの男が、20年代のボンジュの思想形成に絶大な影響を与えたことはよく知られている⁷⁾。この傑物は他方で、20年代中頃から多くの作家たちが政治へと傾く中、彼の指揮する雑誌が極端に右や左に傾かないよう腐心した「^{エクストリーム・ミリュール}極中庸」の精神の持ち主である。『タルブの花』の著者であるこの男は加えて、言語と政治の関係とりわけ「^{ラング・ドゥ・ポフ}政治的常套句」について20世紀最も深く思考した存在の一人でもある。ならば20年代後半に考案されたボンジュ詩学の革命性・政治性の中に、この人物の影響を見ることはできないだろうか？そうした問いを立て彼ら二人の思想交流を辿り直すと、ボンジュの目指す詩的革命の中では、言語への不信の念の克服および言葉が人間精神へ及ぼす〈力〉が問題となっており、それら二つの思想の水源にはポーランがいることが判明する。そのことを以下に詳しく論じることで、私たちは現在まで付随的な形でしか論じられてこなかったボンジュの革命観の素描を行いたい。

1. 一つの固定観念からの脱却：『海賊ジャコブ・コウ』解題の試み

私たちはポーランが1921年に刊行した『海賊ジャコブ・コウあるいは語は記号であるか⁸⁾』（以下『海賊ジャコブ・コウ』と略記）と題された小冊子の第一部を読むことから始めたい。先行研究が論じてきた点でありそして私たちも後で簡単にふれるが、言語と思考の関係についての特異な考察が為される本書を咀嚼することでボンジュの初期詩学は形成されたといつてよい。その一方、詩人の革命観すなわち彼が事物の描写へと向かう経緯においてもこの書で語られたポーランの思想の受容が認められる。

人は通常、「語 (mot)」を「記号 (signe)」として、つまり一つの単語は必ずそれに対応する「観念 (idée)」や「思考 (pensée)」を持つと考えている。しかし言葉に与えられたこうした判断はやや早急ではないだろうか？たしかに「語はそれを用いようとする配慮と不可分に結びついているため、後者がどこから始まり前者がどこで終わるのかを見極めることは難しい」が、他方で「語と文章そして文章と物語の間にはっきりと互いを際立たせる違いは存在しない⁹⁾」からである。

6) もちろん「物の味方 (Parti pris des Choses)」という表現が詩人の同時代人には「共産党 (Parti Communiste)」を強く連想させたであろうことは忘れるべきではないが。

7) ボンジュとポーランの関係を論じた先行研究としては私たちは以下の著作を主に参照した：M. Collot, «Le petit poisson et le maître nageur», in C.-P. Pérez (dir.), *Jean Paulhan et les poètes*, PU de Provence, «Textuelles littératures», 2004, p. 63-78 ; F. Gérard, *Francis Ponge vies parallèles*, Nîmes, Alcide, 2011, chap. «Jean Paulhan, le grand lecteur», p. 13-57 ; A. Yokomichi, «Ponge et Paulhan à l'époque du "drame de l'expression"», *Littéra*, n° 2, 2017, p. 135-146.

8) Jean Paulhan, *Jacob Cow le pirate ou si les mots sont des signes*, (*Œuvres complètes*, t. I, Cercle du livre Précieux, 1970 [Éditions du Sans Pareil, 1921]. 本論ではこの作品からの引用についてはJCの略号とともに上記全集版の頁数のみを示す。

9) «[les mots] se mêlent de si près à notre souci de les faire servir que l'on ne distingue jamais très bien où le souci commence et où finit le mot. / Cependant il n'est pas de différence sensible et de fossé du mot à la phrase, de la phrase au récit» (JC, 127).

実際に検討すると、意味や思考とは単独の語ではなく文章や言説に由来すると考えた方が自然であることが判明する。1921年の書でポーランは、語が思考の記号であるという認識がどれだけ人間の判断を歪ませているのかを示すことで、いま述べた言語についての正しい認識へとその読者を導こうとする。

ある日刊紙が次のような広告を打った―「全ての「未来」の読者に砂糖5キロを (Cinq Kilos de sucre à tout lecteur de «l'avenir»)」。この文章を目にしたとき私たちの多くは、日刊紙の読者全てに後日、砂糖5キロが無料で進呈されると考えるだろう。しかしその想定は誤りである。この広告は実は定期購読の勧めであり、続く文章では、定期購読の値段は年間で25フランであり、それは日刊紙を1年間、通常購入した場合より11フラン安くつくこと、そしてこの差額はバリの物価でキロ当たり2.2フランの砂糖を5キロ買うことを許す値段であるという証明が行われる。明らかにこの広告の最初に置かれた文言が私たちに吹き込む思想は実際の広告の内容と大きくずれている。「この広告は私たちをかつごうとしている」そう捉える人もいようだろう。しかしポーランはここに単なる悪意以上のものを見る。「もし各人がそんな風に簡単にこの広告を片付けられるならば、それは広告とはならないだろう」からだ。彼によればこの広告は「力 (vertu)」を有する。その力とは、「全ての読者」という文言を実際に読む私たち自身が関わりがあることを意識させ、そして実際にこの広告に書かれている通りに「全ての読者」に砂糖5キロが行き渡るよう、行動することを促すような〈力〉である。

この広告のエピソードは、言葉の意味とは各単語からでなくより広い要素、つまり文章や文脈に組み込まれて初めて決定されるものであること、すなわち語が記号でないことの証明である。しかし「完全なる言語への関心 (notre souci d'un langage parfait)」(JC, 132)を持つ私たちの多くはいま述べたようには言語を捉えようとせず、文脈から切り離された語を観念そのものと見なし自らの思考を形成してしまいがちなことがここでは同時に語られている。言葉の〈力〉と呼ぶべきものが発生するのは、この「語と観念の混同 (confusion des mots avec les idées)」(JC, 131)からである。そうした〈力〉の究極が語られるのが、本書の表題にもなったエピソードにおいてである。一人の男が海賊に捕まった。このとき海賊たちは彼と一緒に捕えた水夫らを甲板に並べ、その後、虜囚となった彼らに名前を語らせた。一人の水夫が「ジャック・ディック」と名乗ると、海賊たちは即座にこの男を海に放り込んだ。それを見て男は機転を利かせ、本名の「マッコラン」ではなく海賊の首領の名である「ジャコブ・コウ」と名乗った。すると海賊たちは当の首領をはじめ蜘蛛の子を散らすように逃げ出した。それほどまでに海賊たちにとってこの首領の名前が喚起する畏怖の念は大きかったのである。

この事例では、その〈外部〉に盲目となり、言葉だけに目を向けそれを指示対象そのものと混同する人間の姿が戯画的に描かれている。そしてポーランは警告する。「ジャコブ・コウがそのたびに逃げ出さねばならない風に、私たちもまた言語を前に振舞っている」(JC, 132)、と。つまり、語とは単体で意味を生む「記号」とであるという想定は私たちの認識に深く根付いており、その固定観念から抜け出

さない限り私たちもまた同様の「語と事象の混同 (confusion des mots avec les choses)」(*ibidem*) を犯してしまうだろう、と。しかしこう述べた直後、逆説の愛好家ポーランは唐突に議論を翻す。彼は今まで述べてきたような「語と観念の混同」は多分に脚色を含んだ虚構であり、現実にはそうは発生しないだろうと読者に告白するのである¹⁰⁾。

こうした前言撤回は、観念や事象そのものの現前としての言語という神話が今日崩壊しつつあるが、その廃墟から今度は同じほど誤った別の幻想が生じたことを言うためになされている。その認識とは一同時代に哲学者ベルクソンによって盛んに喧伝された一言葉とは思考の敵、厄介な邪魔者であるという認識である。話題を唐突に変えて話す癖がある講演者がいたとする。彼の話は最後まで聞かないとのみこめない。語が記号であるという固定観念が私たちの思考に最たる影響を及ぼすのは、そうした場合においてである¹¹⁾。ポーランが「記号」と呼ぶ、意味と即座に結びつく言葉に慣れ親しんだ聴衆は「私の話 (*mes paroles*) をよく聴いてください」といった講演者の言葉に耳を貸さず、「彼が言いたかったのは本当にこの語 (*ce mot*) か?」などと眩きながら文章や話の流れからではなく各語から意味や思想を無理やり取り出してしまうからだ。それだけでない。人はさらにそうしてできあがった思想を元の言語と比較し、言葉とは私たちの思考を捻じ曲げてしか伝えない危険で邪魔なものであるという結論を引き出してしまう。

「人が喋り、自分の思考を表すのは、言語によってではなく、言語に逆らっている」(*JC*, 133) といった風に言葉を否定的に捉えるこうした態度は正しい認識だろうか? そうした考え—以下の文章で代名詞 « *elle* » で指示される「私たちの記号についての考え (*notre idée du signe*)」—についてポーランは次のように書く。

Je veux qu'elle nous évite de lourdes déceptions : tout de même, trop défiante, soucieuse toujours d'imaginer le pire, elle néglige la première ressource des mots, leur ressource naïve. (*JC*, 133)

予め言葉の能力を低く見積もってしまえば、落胆することからは逃れられるだろう。かといって言葉が日々果たしている役割に盲目になってはならない。その役割とは、「語 (*mots*) が意味を発生させているという不思議な事態」(*JC*, 134) である。そして言語についての人々の意識が変化する過程でいつしか顧みられなくなったこの「最初の素朴な資源」を私たちが再び獲得するためには、「それを最も弱々しい状態で捉えることを人に強いる」(*ibidem*)、語とは記号であるという認

10) Cf. « Cow, cependant, dans le vrai ne s'enfuit pas. Béril ne se laisse pas séduire à la rime, non plus qu'à la réclame du sucre : "Ils nous achètent", pense-t-il. / Sans doute ; et la réflexion de Marc-Aurèle n'est point telle qu'on ne la puisse aisément réfuter. Le calembour est peu considéré. » (*JC*, 132).

11) Cf. « Aussitôt se montrent les mots, et tels que des signes : c'est où le sens se trouve menacé, ne joue pas, retombe de son haut, de façon que l'on y distingue la pensée d'un côté, de l'autre le mot inerte. [...] L'idée du signe porte, à côté de cet échec et justement son occasion, la marque d'une confiance » (*JC*, 133).

識を疑うことから始めなくてはならないだろう。

以上が『海賊ジャコブ・コウ』についての私たちの読みである。改めて書くと、本書では語が「記号」でないこと、つまり言葉の意味とは各々の語からではなくより広い要素—文章や文脈—から生じるものであり、そして言葉をそのように正しく認識しない者には、言葉が一種の〈力〉を持つてしまうことが語られている。この書を読んだボンジュがとくに惹かれたのもまたポーランが多分に誇張を以て語るこの言葉の持つ〈力〉の側面であったように思われる。

II. もう一つの「素朴な資源」

1922年、ポーランは『新フランス評論』誌に群小雑誌『白い羊』に一人の若手が寄せた作品への短文評を掲載する。この記事はその著者の父親の目に止まる。父親は書評の書き手が、言語への繊細な感性をもつ彼の息子の対話者になるだろうことを察知し、連絡を取ることを息子に勧める。敬愛する父の言葉に従い息子はポーランに詩編を送り、結果、彼は1923年当時グルネル通りにあった雑誌の編集局に招かれる。歓待の後、この詩人はポーランに見送られ、別れ際に彼から『海賊ジャコブ・コウ』を手渡される。詩人はこの書に強く感銘を受けた。名をフランシス・ボンジュというこの青年は以降、20代の作家として最も多感な時期をポーランをかけがえのない対話者・先導者と見なしながら過ごすことになる。

いま私たちが復元した伝記事項の多くは詩人が1984年に行った対談から取ったものだが、その席で詩人がポーランの書の印象として「言語の濃さ」と「謎めいた神秘的な側面」を強調していることは興味深い¹²⁾。このことは詩人がポーランの書を愛読していたとしても、その解釈には彼自身の言語観が多分に入りこんだ可能性があることを示唆している。その点を断った上であれば、ボンジュとポーラン、二人の思想が共鳴したのは第一には「記号」としての言葉という認識に対する異議申し立てであったと言ってよい。当時のボンジュにとっても語とは単なる「記号」以上のものとして認識されていた。ただしその理由はポーランとは異なり、語の物質性の認識から生じる。すなわちボンジュは音や文字といった要素のなかに通常の意味からは独立した別の意味・価値を見出しており、それゆえ彼にとって言葉とは指示対象に奉仕するだけの「記号」ではありえなかった。詩人が文学の道を志したのは、そうした言葉の物質性に由来する別の意味、ジャック・ランシエールの言葉を借りれば「沈黙の言語」を回復・表現するためである。彼はゆえに「文体」や「形式」といった要素が思考に影響を与えると信じており、ポーランの書は詩人のそうした言語観に共鳴したのである¹³⁾。

しかしそうした「言い回し」のような言葉の形式的側面が思考に及ぼす影響を

12) Voir «Entretien de Francis Ponge avec Ghislain Sartoris» dans *Poésie*, n° 26, 1983, p. 96 ; repris in OCII, p. 1434-1435.

13) Cf. «Or l'artiste travaille les mots de l'idée comme le logicien travaille l'idée des mots.» («Baudelaire (leçon des variantes)», *Pratiques d'écriture ou inachèvement perpétuel*, OCII, p. 1043) ; «Les philosophes remarquent que l'on se peigne et lace ses souliers suivant l'idée que l'on a du monde ; l'écrivain, faiseur de langage, c'est en imitant sa première opinion sur le jeu des mots qu'il se prévoit et se compose.» (JC, 128).

感じ取る者は自らの思考を言語化したとき、思考と表現の間のずれもまた意識してしまう。結果、言葉によって自らの思考は表現できない、言葉とは自己の内面性、「思考」を不自由にしか伝えない欠陥品であるという認識に十代の頃より詩人は苛まれ続けることとなる。先に確認したように、こうした詩人の態度はポーランが批判する態度である。著作の中で彼は言う一たしかに言語とは思考を伝え損ねる欠陥品であるように思われる。しかしそれでも言語が日々、立派に意味を発生させていることを忘れてはならない。言語の弱さを嘆くのではなくそれがかつて有していた「原初の素朴な資源」にこそ目を向けねばならない、と。ある時期からボンジュもまたこうした言葉への信頼回復、素朴な言語への回帰を切望するようになる。20年代の彼は言葉が自己を伝え損ねるという認識から言葉の物質性のみを語ろうとする詩学—「言語の寓話 (fable logique)」と呼ばれる—を考案したが、その結果、そうした詩的態度の限界と不毛性さらにはその危険性—失語症と狂気—をその身をもって確かめたからである。

言葉を敵ではなく味方と信頼し、話し書くことを願う詩人にとって最大の問題とは〈方法〉の問題であった。いったいいかなる魔法を以てすれば一度、言語の深淵を覗いてしまった者が、それを知らなかった頃に戻れるというのか? 「そのためには大変なうぶさが必要となる¹⁴⁾」、詩人はそう困難を語る。20年代のボンジュが特別な関心と敬意を払ってポーランの著作を読み込んだとすれば、それは彼の書いたものの中にこの「素朴さ」の回復という難題への解答が語られていると信じられていたからである。残念なことにこの期待は裏切られる。それどころか書簡¹⁵⁾の中でポーランはボンジュがこうした〈方法〉に関心を抱くことにしばしば難色を示す。彼にとって詩人とは言葉の「自然なやりとり、魅惑の状態」(P VII, 400; CI, 101)に留まるべき存在であり、作家の心理や創作の方法論について考察することは彼自身を含む批評の引き受けるべき仕事と考えられていたためである。こうしたポーランの保守的な文学観は、詩人に〈方法〉の探求を諦めさせるものでなかったことは言うまでもない。必然的にボンジュは、彼に「素朴さ」の回復を許すような詩の在り方をポーランの〈外〉にも探し求めることになる。

年長の批評家から一定の距離を置き、思索を重ねる詩人にとって探求すべき〈方法〉とはしかし言語への信頼、「素朴さ」を取り戻すための手段ばかりではなかった。詩人はそれと同じ程に、自己の内面性を表現する手段、「自己の裡なるマイナーな部分 (minorité de [soi]-même)」に「言葉を与える」ための〈方法〉を探し続けていた¹⁶⁾。そしてこうした己の内面性が本質的に言語化を拒むものであるから

14) Cf. «Chaque mot, chaque idée, chaque chose est une sorte de nœud mouvant, de remous insondable : cela une fois compris, il faut retomber sur ses pieds [...]. Malheureusement, pour qui une fois a sondé l'insondable, avalé l'écoeuvant, abordé l'absurde, tomber sur ses pieds devient difficile, et marcher, et parler, écrire... car il y faut une telle naïveté.» («Première et seconde méditations nocturnes», *Nouveau nouveau recueil*, OCII, p. 1180. Nous soulignons).

15) 本論ではボンジュとポーランの書簡については P VII と略記する以下の最新の資料集を底本とする : Armande Ponge, *Pour une vie de mon père*, t. II, 1919-1939, Classiques Garnier, 2020. その上で CI と略記する次の書簡集の頁数を併記する : Jean Paulhan, Francis Ponge, *Correspondance, 1923-1968*, éd. Claire Boaretto, t. I, 1923-1946, Gallimard, 1986.

16) Voir «Rhétorique», *Proèmes*, OCI, p. 193 ; «Le poète», *Pratiques d'écriture* [...], OCII, p. 1011.

こそ言葉への信頼が損なわれたことを鑑みれば、当時の詩人の抱える問題の難しさそして絶望の深さは推し量られよう。こうした不可能を可能にするための〈方法〉をポンジュは、一方で表現形式の工夫の中に、他方で彼の詩の主題・題材の中に探し求めることになる。今から私たちは後者の点について論じたい。

これら「もっとも困難な問い¹⁷⁾」への解決策を与えたものとは1926年に啓示を受け、その後、南仏の漁村グロー・デュ・ロワの滞在を通して親交を深めた詩人の語彙で「事物 (choses)」や「自然 (nature)」と呼ばれる存在である。なぜ事物を語ることが言語の「素朴さ」の回復に繋がるのかについては、私たちは1927年に草された「素朴な資源」と題されたテキストを読むことで確認したい。

L'esprit, dont on peut dire qu'il s'abîme d'abord aux choses (qui ne sont que *riens*) dans leur contemplation, renaît, par la nomination de leurs qualités, telles que lorsqu'au lieu de lui ce sont elles qui les proposent.

Hors de ma fausse personne c'est aux objets, aux choses du temps que je rapporte mon bonheur lorsque l'attention que je leur porte les forme dans mon esprit comme des composés de qualités, de façons-de-se-comporter propres à chacun d'eux, fort inattendus, sans aucun rapport avec nos propres façons de nous comporter jusqu'à eux. Alors, ô vertus, ô modèles possibles-tout-à-coup, que je vais découvrir, où l'esprit tout nouvellement s'exerce et s'adore¹⁸⁾.

作品内では事物の観想がもたらす精神の変革のプロセスが語られている。事物を深く沈むように観想する「精神」はそこに「予期せぬもの」、彼の精神の外にあるものに出逢う。この見出された〈未知〉を「命名」すなわち言葉によって定着したならば、その時、精神はそれ以前とは全く異なる姿に「生まれ変わって」いるだろう。精神は名指すことで事物の中にある〈未知〉なるものを「特性」として〈所有〉¹⁹⁾することになるからだ。ゆえに「生を変える」ためには、ランボーが言い、行ったように彼方へと「出発する必要はない」。すぐ近くにある「無数の未知なる特性」を宿す事物たち、それらをただ眺めればよい²⁰⁾。

このように「素朴な資源」においては、私たちの身の回りにある事物こそが、「精神」が別のものへ生まれ変わる「道徳の水源 (ressources morales)²¹⁾」であるという考えが説かれる。他方でここでは「命名」という言語の果たす役割が強調

17) Cf. «Longtemps je me posai les questions les plus difficiles. Je m'applique à présent aux choses les plus simples.» («Introduction au "parti pris des choses"», *Pratiques d'écriture* [...], OCII, p. 1032).

18) «Ressources naïves», *Proèmes*, OCII, p. 197.

19) 事物の「特性」の「命名」がその〈所有〉につながることにについては長らく未刊行だった「所有 (propriété)」論も参照されたい。父との共作であるこのテキストの中では、事物を物理的に手元に置くことから、理念としてその抽象的な把持へと向かう人間の〈所有〉の発展段階が語られている：voir «Étude sur la propriété» et autres textes, in *PVII*, p. 32 et suiv.

20) «Inutile de partir : se transférer aux choses, qui vous comblent d'impressions nouvelles, vous proposent un million de qualités inédites.» («Introduction au "galeit"», *Proèmes*, OCII, p. 202).

21) «Introduction au *Parti pris des choses*», *Pratiques d'écriture* [...], OCII, p. 1034.

されている点が私たちの目を引く。すなわちここで言葉は思考を伝え損ねる欠陥品などではなく、そのままでは事物のもたらす印象によって覆われ消え去りかねない精神に、命名という行為を通してその主体性を取り戻させるものとして肯定的に捉えられている。このとき言語はその始原の在り様、一種の「素朴さ」を回復してはいないだろうか？もしそうならばポーランの教えの受容をここに見ることもまた許されよう。先の書の中でポーランは、言語と思考の境界は常態では限りなく曖昧であり、言葉が意味を即座に生み出さない時に限り二つは癒着をやめると言っていた²²⁾。テキストの中ではこの論理が反転して展開されている。つまり見出された時点では言い表せぬものである事物の未知なる側面を観想したとき、精神の中で思考と言葉は完全に分かれたる。そして、そのような状態の中で言葉を事物へと向かわせることで初めて、人は言葉の他動詞的側面、それが目の前にあるものを名指すための道具であるという素朴な認識を取り戻すに違いない。

III. 「言葉の力」、精神の革命の主題をめぐる変奏

よって事物の観想がもたらす人間精神の進歩と言語をめぐる認識の是正、この二つこそが詩学「物の味方」が賭金として持つ〈革命〉の両輪である。私たちは次にポーランとボンジュ、二人の間で実際に発生した「言葉の力」と〈革命〉をめぐる議論を見ることで、今述べたことを別の視覚から検討したい。

二人の間で「言葉の力」をめぐる議論が発生する直接のきっかけとなったのは、1929年10月28日に詩人が批評家の手紙に同封する形で送られた「記念碑」と題された詩篇である。実はこの時期ボンジュとポーランは政治問題をめぐって対立しており、この詩篇もその対立の延長線上に置かれるべきものである。より詳しく書くと、二人の対立は「既存の秩序 (chose établie)」に否をつきつける「転覆的なもの (le subversif)」(P^{VII}, 454 ; CI, 126) とその価値をめぐるものである。書簡を繙くと、実行を伴わずあくまでも精神の次元ないし報告の段階に留まる転覆すなわち「内部から変革すること (transformer de l'intérieur)」(P^{VII}, 419 ; CI, 110) を実行すべきと語るボンジュと、そうした転覆に留保の姿勢を崩さないポーランの姿が観察される。後者の無理解は前者には我慢ならない。というのも詩人にとっては、自らの著作の中で言葉が思考に与える深刻な影響を語ったポーランこそが、そうしたマラルメ的「抑制された行動」、実行を含意しない言葉による精神の革命の理念を彼に吹き込んだ張本人だったからである。ゆえに詩篇「記念碑」の中で己をハムレットに見立てながらポーランの名を言葉が思考に振るう暴力に結びつけることで、詩人は対話者にそのことを伝えようとする—「息子よ、言葉の不当な悪戯に復讐せよ / まずはポーランの下でそれについて学べ / 言葉は私たちの役に立つよりもはるかに私たちを使う / この考えが生む絶望に抗うのだ」(P^{VII}, 430 ; CI, 113-114)。

この詩的挑発に対して、11月5日の書簡の中でポーランは応答する。彼はそこで、自身が「言葉の力」と呼ぶものに関心を持つのは、その実存を信じているか

22) 註9番および11番を参照。

らではなく彼にとってそれが不合理に思われるからであることを説明する。

Je ne pense pas qu'il existe rien au monde qui ressemble à un pouvoir des mots
 *. [...] * est-ce que l'idée elle-même de ce pouvoir n'est pas telle qu'on ne la
 puisse former ? Il est bien entendu que « maison » ce peut être aussi bien la
 maison réelle, faite de pierres, que le mot fait de lettres. Ce sera la maison réelle
suivant un langage, et le mot suivant un autre langage et d'autres conventions.
 Maintenant, est-ce que dire que [si?] le mot influence la chose (ou l'idée que
 nous en avons) ce n'est pas simplement, non pas constater un fait, mais passer
 d'une convention à une autre convention, glisser sans prévenir d'un langage à un
 autre langage ? (Je crois qu'il y a là quelque chose qui est très grave et qui peut
 nous libérer prodigieusement. Ce n'est pas non plus contraire à *Jacob Cow*, mais
 ça va plus loin.) (PVI, 433 ; CI, 111-112)

もし言語が私たちの思考に影響を与えるという想定が正しければ、それは数刻前までは音や文字という物質だったものが突然、「何の前触れもなく」、意味や思考といった精神の領域へと入りこんでくることを認めなくてはならない。そういった「滑り込み」つまりあるときは語またあるときは観念として存在する一貫性を持たないものとして言葉を見なすべきだろうか、と書簡内でポーランは問う。こう言うことで彼は言語はどこまでも物質であり続け、それを観念といった精神的なもの、「別の言語」と混同することは錯覚、「理知的思考の奇妙な欠陥」²³⁾であることを暗に語っているのである。しかし他方で—この点は引いた書簡内で顕在的に語られていないが²⁴⁾—言葉にはそのように正しく認識することを妨げる力、つまり本来交流を持つことはない語と観念がどこかで交わるという期待を精神に抱かせる不思議な力があり、多くの人々がそうした誤った認識の虜になっているとポーランは確信していた。ゆえに私たちの思考に「深刻な」影響を与えるそうした言葉のもつ魔力、それを解明したならば「私たちは驚くほど解放される」に違いない。

手紙で打ち明けられたポーランの「言葉の力」に対するアンビバレントな姿勢は、彼を「言葉の力」の発案者とみなしていたボンジュを当惑させると同時に安心させたに違いない。というのも詩人にとっても言葉が単体で人間の思考や心理に大きな影響を及ぼすというポーランの主張は信じがたかったが、それでも事物と結びついた特定の言葉は精神に影響を及ぼすと彼は信じていたからである。そ

23) «[D]éfaut étrange d'un raisonnement» : «Lettres à Jean-Richard Bloch», *NRF*, juillet 1973, n° 247, p. 3. 引用箇所解釈に当たっては、René Etiemble がスリジーの学会でその重要性を強調した 1931 年に書かれた作家プロット宛ての本書簡を私たちは大いに参考にした : voir *Jean Paulhan le souterrain*, Colloque de Cerisy de 1973, 10/18, 1976, p.316-318.

24) Cf. «Ce qui me semble grave dans le langage, c'est toute la part, par laquelle il s'assure lui-même ; comme l'on répéterait : un chien s'appelle chien, et tout ce qui ne s'appelle pas chien n'est pas un chien. Naturellement, c'est beaucoup plus rusé et dissimulé, mais ça revient aux mêmes affirmations» (PVI, 195 ; CI, 18).

のことは29年11月12日の日付を持つ以下の書簡が語ることである。

Je ne crois pas plus que toi (?) au pouvoir des mots sur les choses (je parle grossièrement). Mais plutôt il me semble qu'il n'existe au Monde moral des choses que les mots – et que c'est malheureux (non seulement pour les choses). Mais remédiable, parce que les mots sont de l'homme (?) ~~du poète~~. Et que cela une fois “fait-compris” nous pouvons en être prodigieusement (comme tu dis) libérés.

Bref je crois : primo qu'il n'y a qu'un tout petit peu des choses dans les mots, secundo je crois au pouvoir des mots sur les sentiments de l'homme (~~on~~, et tertio par conséquent à la possibilité de modifier les sentiments ou l'humeur de l'homme (c'est-à-dire de soi-même) simplement en découvrant aux choses de nouvelles qualités nommables (ce qui devient possible lorsque l'on part des choses, et qu'on les considère pour elles-mêmes). (P^{VII}, 434 ; CI, 115)

ボンジュは精神の中では言葉よりも事物によってはるかに占有されていると感じる。そしてかたくなに精神と物質の対立をそこに見るポーランとは異なり、「詩人」として表現を工夫し、語を物質に近づけることで、彼はより多くの事物の物質性を精神に招き入れることが可能と考えた。「言葉の力」とはそのままでは不定冠詞存在である「事物」^{ジョース}を定冠詞存在である「特性」^{カリテ}へと変換するこの力において他にはない。ゆえにそれが「事物の描写」のために用いられたならば、言葉を以て人間に変革をもたらすことは可能であり、万人がそのことに気づいたならばそのとき私たちは言葉とその〈力〉から「驚くほど解放されてしまっているだろう」。書簡内で「言葉の力」に与えられたこの再解釈は実は上に引いた議論のきっかけとなった「記念碑」詩篇内で詩的に言われたことを平たく言い直したものである。この大事な理念については更にもう一度、「言葉による事物の修正」²⁵⁾と題されたテキストの中で言い直されることになる。

以上から、〈革命〉をその賭金に持つ「物の味方」の詩学の生成におけるポーランの役割の一端を立体的に示せたのではないと思う。ポーランとボンジュ、二人が「言葉の力」に与えた解釈は異なるが、両者は共にこの理念を骨子に先述の「30年代精神」が理想とした精神の革命を実行へと移そうとしたことに変わりはない。その点を確認することで、私たちの考察のひとまずの結びとしたい。

(大阪大学大学院文学研究科・文学部招へい研究員)

25) この作品は明らかにその内容・文体ともに私たちが上に引いた書簡内の議論の再演である。Cf. «La parole serait donc aux choses de l'esprit leur état de rigueur, leur façon de se tenir d'aplomb hors de leur contenant. Cela une fois fait compris, l'on aura le loisir, et la jouissance, d'en étudier calmement, minutieusement, avec application les qualités décomptables.» («De la modification des choses par la parole», *Proèmes*, OCI, p. 174. Nous soulignons).